

堀田善衛集

堀田善衛集

新文學全集

河出書房

堀田善衛集

新文學全集 第十回配本

昭和二十八年三月一日 初版印刷
昭和二十八年三月五日 初版發行

定價 二三〇圓
地方定價 二四〇圓

著者 堀田善衛

發行者 東京都千代田區神田小川町三ノ八
河出孝雄

印刷者 東京都青梅市根ヶ布三八五
山田一雄

發行所

東京都千代田區
神田小川町三ノ八

株式會社

河出書房

電話神田(25) 三一七四番

齒 車

一三

廣場の孤獨

一八

年 譜

二四

裝幀 脇田 和

堀田善衛集

捜索

機は遮ぎるものもなく眞直ぐに伸びた滑走路の端に、脚を車止めでぐいと止められてゐた。

地に脚をつけ、翼を張り、靜止したままで發動機をフルに廻轉させて、飛び立つための力がうちに充ちて來るのを待つてゐる飛行機ほどに、〈出發〉といふ言葉の意義をなまなましく感じさせるものはない。汽車や汽船による出發は、出發といふよりもむしろ〈別れ〉といふに近い、つねにある情緒的なものを纏綿させてゐるやうである。飛行機による出發は、見送る者にとつても、それに乗つてゆく人間を送るといふ氣持から、いつか飛行機そのもののたたずまひに注目させるやうになる。そして一旦飛び出した以上、機は地上の秩序とは全く異つた空間へせり上つてゆき、次に下りるところといへば、これは遙かに異つた土地である。しかも無事に着陸しなかつた場合の異様さ加減は云ふまでもない。飛行機といふものは、それに乗つてゆく人間の様々な絆を一應解いてしまふ、或はそれを單純化する作用をもつてゐるやうである。

殊に戰時中の、鵜殿がいま乗り込んだやうな新聞社の使ひ古した機體だと、専門家でない限り、誰にしても格別な緊張を覺えざるをえない。きらきら光る圓を描いて回轉してゐる左右のプロペラの軸は上下にぐらつき、發動機からは眞黒な潤滑油が暗綠色の翼の上へべつたりにじみ出てるのだ。發動機の轟音のために、機内外の物音は何一つ聞えず、既に搭乘して機の調子を見てゐる操縦士や機關士は、機外の整備員と手眞似で話してゐる。つい近くに人間が動いてゐるのに、その聲も音も全く聞えぬといふことは、眼の働きを一層鋭くする。鵜殿はそここの螺子がびくびく動き、翼と胴體の接合部が變にふはりふはりとふくれ上ることなどに神経を尖らし、このまま離陸されたのでは、空中で、いつとはなくはらりはらりと音もなく、左右の翼も屋翼も機體から離れていつて、自分自身もまた氣もつかぬうちに空中に消えてしまふのではないか、とさへ思はせられた。

車止めをはづされた機は、螺子も何もがたがたのまま狂つたやうに滑走路にのしかかつていつて尾翼をもち上げ、海の一步手前と思はれるところで地を離れ、島の多い博多灣を旋回しながら、ぐいぐい高度をとつていつた。やがて水平飛行にうつり、操縦士が自動操縦裝置に切りかへて南方のものらしい煙草に火をつけた頃、鵜殿もいくらか自分にかへつた。豪奢な旅客機ならばいざ知らず、つぎはぎだらけの民間機では、人は離着陸の際には肉體の存在を忘れさ

せられる。

縁がかつた青の海が機の直下を中心に凹面鏡のやうにきらきら光つてゐた。また風防ガラスを通して上を見あげると、雲一つない奇蹟のやうな秋天が手のかけやうもなくぬけ上り、どことなく奥の方へゆくに從つて薄桃色の漾氣を漂はせてゐるやうに思はれ、前後左右とか上下とかといふ言葉の意味を失はせてゐた。高度はせいぜい七八百米のところであらうが、鶴殿はもう何回か飛行の経験があつたにも拘らず、機速の目度となるべき對象物がなく、遙か遠くに地球の縁どりのやうな白い霞がかかつてゐるだけなので、しばらくは下方にひろがる蟻地獄のやうな海と、機がその中に浮いてゐる天のほかには何物も存在しないところへ閉ぢこめられたやうな感じがして來て、再び腦に「空に消える」といふ言葉がかへつて來るのを感じた。

發動機が順調に回轉してゐる限りは、健康な人が心臓の鼓動について何の懸念もたぬやうに、下方へ「落ちる墜落する」などとは到底考へられぬことである。しかし餘程飛びなれた人でない限り、飛行機の旅、殊に廣大な海上を飛ぶときは、目的地はそれが眼に見えて來るまでは果して行きつくものかどうかといふ、かすかな氣がかりを去ることが出来ないものである。しかも九州雁ノ巢航空隊基地詰めのA社の記者鶴殿と、同社の連絡機搭乗員三名を乗せたこの飛行は、「消える落ちる墜落する」ことについて考へざるをえない飛行であつた。

彼らは、同じ社の別の機が、臺北から博多郊外の雁ノ巢飛行場への歸途、離陸後一時間半にして油送管に故障を生じ、方向を變更して大陸の海岸沿ひに上海の大場鎮飛行場へ向ふあひだに、浙江省沖の舟山列島附近でつひに消息を絶つた、その後を搜索に飛び立つて來たのであつた。同機には鶴殿の僚友が二人乗つてゐる筈であつた。いづれも南方に從軍して熱病にかかり、歸りを急いでゐた。

昨日の夕刻、飛行場からの電話で歓迎の準備も何もうつちやらかして鶴殿が基地司令部の無電室へ駆けつけた頃は、機はもう臨終に近かつたのだ。

「方向二百八十二、方向二百八十二……。」

同機は絶え間なく方向を報告し、彼らの唯一の人間の關係である地上の無電機も誘導電波を出し放しにして、油の續くうちに安全な着陸地、少くとも日本軍占領地區へ導かうと努力してゐた。また基地司令の命令で、單座戦闘機以外のものに對しては危急の場合のほか使用を禁じられてゐた無線電話の封印を解き、直接人間の聲で、

「二百八十五度ヲ維持セヨ、二百八十五度ヲ維持セヨ、二十五分後ニハ舟山列島柳根拳島上空ニ達セン、油送管破損箇所ヲ閉止スル方法ナキヤ。」

と、難航する機を掌ののせて運ばんばかりに呼びかけた。無電室には新聞關係者や將校や兵がいつとはなく集つて來てレシーヴァーを耳にした通信兵の鉛筆を見守つてゐた。この頃になると、病人の枕許に人々が集るやうに、臺

北、鹿兒島、釜山、上海、福州、杭州そして遠く青島や大阪までが方向測定の電波を送る救援隊に加はつて来た。シナ方面艦隊は六横山島の燈臺に點火を命じた。まだ戦争も初期の頃で、飛行機や人の生命の大切さについての意識が一般に失はれてゐなかつた頃のことである。誘導電波や無線電話にのつた人の聲は、血を流すやうに油を空中に霧散させながら飛びつづける機に向つて集中していつたが、機はしかし、つひに致命的なものにぶつかつてしまつたのだ。

「下降氣流に遭遇、高度六百ニ下ル。」

それまで基地は出来るだけ高度を維持してゆけと通報してゐたのだが、この下降氣流に遭ふと、發動機が如何に調子よく回轉してゐても機は下降するのだ。高度を失ふまいとして上舵（おかげ）を引けば、速力を失つて尾翼の方へぐにやりと引き戻されるやうになる。つまりその中に機が浮んだ空全體が墜落してゆくのである。

やがて最後のな通信が来た。

「右發動機、停止ス、燃料、後十分、高度三百。」

瀕死の病人が屢々残酷なしやつくり（つくり）に襲はれるやうに、この機の右肺もしやつくりの末、つひに停つてしまつたのだ。

「着水セントス、鳥影ヲ見ズ。」

人々は水の音を聞く思ひをした。

通信も勿論これが最後であつた。彼らはつひに夜の中に無電が作つた網を破つて向う側へ姿を消したのだ。無電室

に駆けつめた人々も、一人去り、二人去り、最後には當直員だけになつた。着水するといふ彼らの遺言を受信しなかつた無電局はなほ執拗に呼びつづけ「X機方向測定ナシ、X機方向測定ナシ」と他の無電局に對しても報告を要求してゐたが、やがてそれも一つ消え、二つ消え、空もまた再びもとの沈黙にかへつた。

無電室を出た人々は、一樣に暮れ切つた夜空を見上げては、黙々と飛行場の廣大な闇の中に消えていつた。この同じ無限の闇が、遠く或る特定の地點で海と接觸するところで、五つの人間の生命が飛行機とともに墜ちたのだ。

オペレーター（無電技手）といふのを略してオペ、オペと呼ばれてゐた若い通信士が暗號帳と首つびきでしきりに何かの電文を翻譯してゐた。

〔雁ノ巢基地命令〕海軍〇〇司令部機、鹿兒島ヨリ低空、龍華飛行場へ直航スルニツキ、濟州島マデ逆行、北上シ、同島上空ヲ十分間旋回ノ後、一路大場鎮飛行場へ直航セヨ、終リ。

海軍の某司令部機が上海へ行くからと云つて、同じ上海の陸軍飛行場へ行くこの機が何故北方へ退避してかからねばならぬのかわからなかつたが、鷓鴣殿は操縦士機關士について彼のところへまはつて來た通信を見てうなづいた。ずんぐり肥つた體軀にふさはしい丸顔の機關士は、操縦士の耳許へ口をもつていつて、

「お人拂ひと來やがつたな。道が狭いとさ。殿様のお通

りだわ。」

と嗚鳴つた。

飛行服の上に、どうやらマニラあたりでせしめたらしいナイロンかプラスチック製のぴかぴか光るジャンパーを着込んだ操縦士は、操縦桿を引いて機を大きく旋回させた。

鶴殿は外を見ることにも飽き、ふりかへつて機の内部を眺めた。普通ならば座席が六つついてゐる筈のところには、座席は取り拂はれて大きな眞空管を入れた木箱が五つ六つ網で胴の兩側にゆはへつけてあつた。新聞社の飛行機も原則的には軍航空隊の中に編入され、便毎に何かの用務を果すことになつてゐたのだ。この機も大場鎮へ基地用の眞空管を輸送するついでに、油の許す限り舟山列島上空を搜索することになつてゐた。鶴殿は鬚の剃り後の青々した操縦士の細長い横顔を何となく見詰め、地上でならこの男も結構「好い男」の部類に入るな、と思つた。彼は別に緊張してゐるといふのではないが、計器を見てはバルブやスイッチを押したり引いたりする手先から身體全體に、手なれた道具に確實に結ばれた人間の安定感があふれてゐた。飛行機乗りには、ちやうど船員などにも見られるやうな、一種特別な氣質があるものである。船乗り氣質といふものがあるなら、飛行機乗り氣質とでも云ふべき、ものがある。地上にゐるときの彼ら、殊に都會で遊蕩してゐるときの彼らは、人によつては與太者ではないか、と思はれるかもしれぬほどに言葉使ひも荒く、ぞんざいな行動を取る者が多

い。現に今、座席で背をまるくして財布の中味を勘定してゐる機關士は、昨夜僚機が不時着したと聞くと、物も云はずに勝手に車の自動車を飛ばして博多の遊廓へ乗り込み、亂暴狼藉の限りをつくして憲兵につかまつたといふ勇士であつた。しかも憲兵が明朝飛び立つ機關士と知つて自動車に同乗して飛行場へ送りかへす途次、銘酩のあまり憲兵が青くなつて途中で下車させてくれと手を合せたといふほどの、派手な運轉振りを見せたといふ。この勇士は、今朝眼覺めるとすぐ、酔ひ醒めの水と一緒に多量の覺醒劑を服んで出て來たのである。彼がむつちりした、まるい短い指先で勘定してゐる財布の中味は、色も形も實に様々であつた。中國の儲備券聯銀券、佛印ピアストル紙幣、比島の軍票、泰國のバーツ等々にまじつて禁制の米弗や香港弗までを取り出しては一枚一枚器用に皺を伸してゐるのである。彼の考へてゐることは、舟山列島上空で花束を投げた後、上海での一夜に買ふべき女か、祕かに内地へ持ち込んで賣り飛ばすべき何かの物資くらゐのものであらうか……。彼ら搭乗員に共通する表情といへば、三人ともどこことなく馬面に近い、何か肝腎のものが抜けてゐるか足りないかする、與太者によくある……馬鹿面、といふ言葉が出かかつたのを鶴殿はあわてて抑へた。農夫が鋤で畑を耕すやうに、確實な道具を手にしたこれらの人々の表情が馬鹿面である筈はない。しかし彼らには、どうにも云ひあらはし難いほどに、事務机にしがみついて一生を過す人々とは異つ

たものがあつた。

「おい。」

と機關士が財布をしまひこみながら旋回を終へた操縦士に話しかけた。話しかけたといふよりも發動機の轟音にも負けぬ大聲を張り上げたのだ。

「本社ぢやなァ、ゆうべ落つこつた連中のことをなァ、バナ屋つて云つとつたらしいぞォ。」

「そんならなァ、お前は純綿屋か毛絲屋だぞォ。」

二人は顔を見合せて笑つた。笑ひ聲は聞えない。いくら騒音の中でも、大聲張上げて互ひに聞きとれるやうに笑ふなどといふことは出来ることではない。寒さに頬を眞赤にしたオベ少年がレシーヴァーをはづして會話に加はつた。

「臺灣通ひがバナナ屋で、シナへ行く連中が純綿屋なら、南方通ひは砂糖屋か靴屋ばつてん。」

「なに云つとるかァ、このバッテン屋めェ。」

「おい、潤滑油が洩りすぎるなァ、こんなオソボロをいつまでも飛ばせるから奴等みたいに落つこちるんだぞォ。」

「鵜殿さん、寒かつたらァ、これ着て、下さァい。」

四方八方から隙間風がびゅうびゅう吹き込み、寒さに慄へてゐたところだつたので、鵜殿は機關士がさし出してくれたジャンパーを借りに立ち上つた。

遙か前方に大きな泥色の島が浮んでゐた。

「濟州島。」

と通信士が耳許へ口をよせて囁鳴つてくれた。

地圖といふものは屢々人の眼を欺くものである。大抵の地圖では、海は淺い青、湖や河川は濃い藍色になつてゐる。

そして藍色の河が勢ひよく、うすけた青の海へほとばしり堂々と乗り込んでゆくやうに書いてあるが、機上から見る生の地圖はこれと全く反對である。濃藍の海が、まるで、咽喉の渴いた犍猛な巨獸が島にしがみついて頼りない薄青の色の河水をむさぼるやうにごくりごくり呑み込んでゐるやうに見える。入江や灣も、海を抱いてゐるなどといふ生優しいものではなく、島をとりまく部分だけ海がむつくり起き上つて鋭い爪をたて、引き摺り込まうとしてゐるかに見えるものである。空中勤務者にとつては、ともに空にあつて遙かに誘ふやうに輝く夜の星以外の自然は、悉く敵意を含んだものなのだ。

濟州島は一九五〇米の漢拏山の中腹に緑の輪をめぐらしたほかは、赤土色に灼けたやうな無愛想な島であつた。

機は高度を下げ、鋭い圓錐形の漢拏山中腹に沿つて旋回をはじめてゐた。ふと鵜殿は、このそつぽを向いたやうな島に不時着しなければならなくなつたと思つたら、と思ひついで下を見た。無數の小さな石ころのやうな、しかし實際には見上げるやうな巨巖であるに違ひない黒い岩が山肌に吹き出物のやうにとりついてゐた。若しこの峻しい山と、海岸も崖ばかりな島へ不時着するとしたならば、安全な着陸はもとより不可能である。さう思つてみると、山も海も平地も、それらはつねに、地球がおのれの重力にさからひ

去つた者に對してむき出してゐる裸の牙にほかならないのだ。岩一つ、小屋一軒、また草原に秘められた優しい小川や、時には馬か羊が一匹ゐたとしても、それは死以外のものを意味しないのだ。(空に閉ぢこめられた人間)と鶴殿は考へた、いまここで彼らの生存を保證してゐるものは、彼ら自身の肉體と發動機の回轉にまで、ぎりぎりに制限され單純化されてゐる。基地からの無電は、「旋回ヲ中止シ、出發セヨ」と命令して來たが、地上社會の鼓動との接觸もまた一回に數語をつたへて來るにすぎない電波だけに限られてゐる。とは云へ、この人間社會を代表したモールス信號は、飛行機そのものをがっちりつかまへてはなさないのだ。飛行機といふ、極めて近代的な機械が、何といふ原始的な孤獨と、地表及び空中に散らばりながらも互ひに連帶し、しかも自然に抗して生きる人間の原型的な在り方とを生んだことか、と鶴殿は眼を睜つた。しかし眼を睜つても、見えるものが非情な機械と空と海でしかない場合、人は物を考へるためには眼を瞑らねばならなくなる。眼を瞑ることによつて現實に、いや、地上の現實にかへり、様な絆のなかに身を置いてみなければ、何を考へてもその思考には全く重さを感じることが出來ないのである。これが、汽車で眠れない人も、長途の飛行機旅行ではいつか必ず眠ることの理由なのかもしれない。彼らは、地上的な意味に於ては、醒めんがために、眠るのだ。昨夜彼が寢床で輾轉しながら、海に墜ちた僚友たちのことを考へても、或

る確實な重量を持つてゐる筈の(へ死)といふ觀念に一向に辿りつかなくつた譯が、いくらかわかるやうな氣がした。彼らは死んだのではない、還つて來なかつたのだ、地上の絆の向う側へ出て行つたのだ、と考へてみると、(黃泉の客となる)といつた古い言葉がかへつてある實感をもつて來るのであつた。とするとしかし、彼らは一體何を搜索に行くのか? 最も近代的な機械を使用してゐる人間が、ここでは最も原始的な信仰と膚接してゐるのである。機柱にはりつけられた神社の護符が奇怪な人間の象徴として眺められるのであつた。

機は眞空管輸送のついでに僚機を搜索に出て來たのであつたが、正確に幾何學的な模様をしたうねりの海を見はるかしてゐると、機體の一片をすら發見することがどんなに難しいことであるか、それはもう絶対に不可能な事としか思はれなかつた。この地球は、特に海は人間の痕跡を消すことにかけては天才である。飛行士たちは、飛び出すや否や、人間の痕跡の絶えた、幾何學的やうな宇宙の神祕の中へとびこんでゆくのである。鶴殿ももう、僚友たちの生命のあとを索めうるなどとは思つてゐなかつた。しかしそれが莫迦莫迦しいほどの不可能事であるならば、彼らは矢張り眞空管を輸送する、ほんのついでに出て來たに過ぎぬのであらうか。

彼は墜ちた僚友たちの遺族のことを考へようと努力し

た。それを考へることは全く努力のいることであつた。彼らの妻や子供たちの顔が浮ぶには浮んでも、あつけなく消えてゆき、それよりも彼の脳には、かつて見た映畫の一幕が奇妙な執拗さをもつてこびりついてはなれなかつた。それはある定期航空の操縦士の妻が、朝方、夫の飛行機が町の上空へ定時に還つて来るまでベッドの中で眼覺めてゐて、爆音が聞えて來ると、

「Still living, still living……」(まだ生きてゐる、まだ生きてゐる)

と呟くシーンであつた。しかし(はまだ生きてゐる)といふ考へ方は、いかにも地上のものである。空中にある者は、どんな場合にもまだ生きてゐるなどとは決して考へない。生死といふ言葉すらが、地上のそれとは現實を異にするのだ。ここにある四人の人間は、人間といふ言葉が含まれるものから、何かしらずれてゐる、剝がれてゐる。そのずれ方、剝がれ方が飛行機乗りの氣質に荒々しい、投げやりなものを附加し、むき出しにするかもしれない。彼らの思考は、恐らくは計器の目盛りや無電の調子や天體などに集中されてゐるか、或はすべてが順調ならば單獨飛行でない限り、仲間と馬鹿話か猥談でもしてゐることであらう。全く馬鹿話か猥談ででもない限り、空中ではどんな深刻な話題もその現實性をどこかで解かれてしまつてゐる。殊に憂ひとか悲しみはむしろ奇怪なものさへ思はれるのであつた。彼とても遺族の悲嘆が全くわからないといふのではな

い、それを思ふと心臓のあたりには痙攣に似たものを感じるのだが、それでもなほその痛みすらが何となくけうといものとしか思へないのであつた。この搜索行がはつて、再び地上に下り立つたときには、何か自分の人生觀とでもいふものが變質するのではないか、とさういふあやしい氣持を味はひつつ、彼は次第に小さくなつてゆく濟州島をふりかへつてみた。恰も後ろの方にはつねに、これまでの手なれた生活があるとでもいふやうに。

彼には次第にこの搜索行が、僚友たちのあとをもとめてゆくものではなくて、自分をめぐる、何か全く未知なものを求めての行であるといふ風に思はれ出し、人間の世界とは全く無關係な空と海に、或る底深い畏怖を感じた。この地球上、人間の住んでゐるのはほんの限られた土地にすぎない。水平線上に船團が見え出し、それが彼の氣持を轉換してくれた。ところがその縦に長い船團の上空を横切るとき、突然、全く出し抜けに、鵜殿は自分が爆撃手であると假想して、一隻一隻狙ひをつけてボタンを押す眞似をしてゐるのに氣付いた。何十隻かの船は悉く船腹と甲板に大きな日の丸をつけてゐた。その赤い丸に狙ひをつけてゐたのである。同胞たる出征將兵を乗せた船を爆撃しようなどと、たとへかりそめにもそんなことを考へるとは。それにいまのいま人の生命について考へてゐたのに。今日のおれは大部分調子が狂つてゐる、と彼は果然として他の三人をかへりみだ。すぐ横の張り出し机によりかかつた通信士は船團と無

電をかはしてゐた。前の席の操縦士は翼を上下に揺すつて挨拶を送り、機關士は急降下する機の發動機の音に、料理の味でもみるやうな顔つきで注意深く耳を澄してゐた。勿論、爆撃といふ考へにしても、單なる呆けた思ひ附きに過ぎぬのだから、さして咎めるにはあたらぬかもしれない。しかし本當の爆撃機乗りにも、はるか下方へ爆弾を投下する際には、幾分か遊びの氣持がありはしないか。もしあるとすれば、たとへ空中にあるときは地上の一切が幾分けうといものには思はれるとはいふものの、人間は何と異様な氣持で多數の、同じ人間を殺傷し燒き捨てるといふ恐しい行爲をするものであらうか。鶴殿は頭の中の時計が、いと逆さまはり出したやうに思ひ、おのれの手を何か異相なものでも見るやうな眼つきで見詰めた。

機が船團を遠くはなれたときには、彼は何とない安堵を覺えた。

海が揚子江の影響をうけ、濃藍からくつきり一線を劃して濁つて來た。

「おい、浙江のなア、海鹽のあたりのなア、鹽田にでも下りてゐてくれんかなア。」

機關士が一句一句切つて操縦士に呶鳴りつけた。彼らは思ひ出したやうに遭難機の運命について語り出した。黙つてゐても誰もがそれを考へてゐたのだ。もう海も黄色くなつてゐた。

「駄目、駄目、駄目さア。」操縦士は黒い皮手套をはめた

手を振つた。

「もし下りたにしたつて、鹽田といふ奴はなア、白くて廣いし、不時着にもつてこいのやうに見えるけどなア、あれあ足で踏んでも堅くて大丈夫と見えるけどなア、あれに下りるとなア、ズンと脚の重さで下へのめり込んじまふんだよ、なア。下は沼なんだぜ。頭を突込んで、火だよ、火よ。黒焦げのおだぶつと決つとるんだよ、なア。さうでなくたつてあの邊は敵地だぜエ、なア。」

「ふうん。三界にイ、身イ入るるところなし、旅鳥、かア。」

機關士は浪花節風に節をつけてうなつた。

「三界でだめなら、ねエ、おつさん、四階へ上つてゆけばいいや、ねエ。」

無電の少年が口をつつこんだ。

「馬鹿野郎、上るんぢやなくて落つこちるんだぞオ。」

少年はいらぬ口をきいて叱られたとでも思つたか、そそくさとレシーヴァーを耳にあてダイヤルをまはし出した。

操縦士はしばらく黙つてゐたが、誰に云ふともなく前方を睨んだまま呶鳴つた。

「落ちるも上るもなア、おんなじさア、三階だらうが四階だらうが。墮ちるときはなア……。」

とそこで彼は一瞬口ごもり、操縦棒から兩手をもぎ取るやうに離してダイヴィングのやうに前へつき出し、急にせきこんで、

「ちよつとなアちよつとなア、すうッすうッとゆくんさア、落ちるやうな上るやうなもんさア……」

鵜殿は幽霊が人の咽喉許へつかみかかると左へ傾いた。機關士より二つ三つ若い、三十四五の操縦士は明らかに興奮してゐた。機關士は不意に立ち上つて操縦士を睨みつけたが、やがて此奴どうかしてやがるといふ風に頭を振つて、

「どうも左が重いなア、手エ離すと左へ切れるやうぢや、なア。」と呟くやうに云つてから綿密に計器を一つ一つ調べ「四階の海なんぞへ放りこまれちや、わしやかなはんよオ。」と呶鳴り、ついで鵜殿の方をふりむいた。

「そろそろでせよ。」

彼は手套の指で奥の方の真空管の箱にのつてゐた花束を指さした。

鵜殿はよろめきながら花束をとりにつた。花びらの一枚一枚は、發動機の回轉のためにびりびりふるへてゐた。

海上遙か前方に、ふはりとかがつた霞が光線を濾してもするの、何色とも云へぬ微妙な色あひの島影がいくつも見え出した。

「左から馬鞍列島、巴克列島、亂形列島です。」

鵜殿は白い芙蓉を中心にした花束を胸に抱き込んで坐つた。花びらにはところどころ油の滲みが出来てゐた。寒さに硬はばつた頬に花びらが觸れ、かすかな匂ひが漂つて來たとき、どうした加減か突然彼は早く地上へ下り立ちたい

といふ悲しいばかりな衝動に驅られふいと立ち上つた。瞬間、彼の眼にははつきりと僚友たちの顔が浮んだ。青ざめた顔々の背後で花々はみな一様に慄へてゐた。

大きな晝の月が、いよいよ明らかになつて來た島々の奥にぼんやりかかつてゐた。

「鵜殿さん、どうせ、どこへ墜ちたかわかりませんし、霞がかかつてゐますから……それに、濟州島なんかへ寄り道させられたんで、あまり油がありませんから、舟山島の東の普陀山——ここは觀音の靈場で、寺もたくさんあります。その邊の海へ投げませうや。もう五分くらゐです。」

彼らはいつの間にか白手套にかへてゐた。機が大きく旋回しはじめると、機關士はスロットルをひらいて發動機をつづけさまにふかし、操縦士の目くばせで通信士が風防ガラスを引いた。斬るやうに冷い風が吹き込んで來た。

「敬禮。」

三人の搭乗員は右手をあげて舉手の禮をつづけ、機は高度を下げていつた。

花束は風壓のせめか、窓から投げると直ぐ紐が解けてばらばらになり、すつと後方へ流れていつた。機を急旋回させて白赤青緑などの、花々や葉が純粹な點のやうに浮いてゐるあたりを二度三度四度まはつた後、操縦士は通信士に大場鎮との接觸を命じた。

花々は色あざやかな酒を風に投げたやうに、すぐ見えなくなり、空も海も、何事もなかつたかのやうにもとの無に

かへつた。その中で寒風に吹きさらされて擧手の禮をつづけた三人の飛行士たちは、死者に對してではなく彼ら自身この世に訣別の挨拶を送つてゐるかのやうな嚴しい顔つきをしてゐた。

機關士はこれを最後、といふやうにいま一度發動機を大きくふかして煙草に火をつけると、もう氣輕に「エート、鵜殿さん、この邊はシナの瀨戸内海でエゴざいます。」と遊覽バスの案内嬢の口調、それも關西辯でまくしたてるといふ手の込んだことをやつて、鼠浪湖山とか雞龍山とかといふ奇妙な名の島々や、海寇山といふむかし和寇がたむろした島とか、このあたりの名物、海賊などについての説明をはじめた。操縦士はしかし、何ものかに憑かれたか思ひ詰りでもしたやうに操縦桿を引きつづけ、機はぐいぐい急上昇して高度計は既に千五百米を越してゐた。鵜殿は寒さに齒をカチカチ鳴らせ腰から下が痲痺するかと思つた。いつの間にか島案内をやめた機關士は、操縦士の青ざめた横顔を不審氣に凝視して、

「おい、失速するぞオ、いくらか下降氣流だ、ゆんべの二の舞だぞ。」

と呶鳴り、背中をどすんと叩いた。

漁船がジャンクらしい褐色の帆をあげた舟が島々のあひだに散らばつてゐた。それは地球の上に棲息する人間たちが、大陸や島々と互ひに消息をかはしあつて生きてゐる様を示してゐた。けれどもいま彼らが敬禮し、花を投げたそ

の相手たる僚友たちは、いはば生きたまま直接、死に、もう地上にも空中にも、海中にさへも存在しないのであつた。肉體は、いや遺骸は海中を漂浪して魚に食はれてゐるかもしれない。がそれはもはや魂のない、まさに魚に食はるべき一個の物にしかすぎない。死ぬのは、と鵜殿は思つた、肉體ではなくてむしろ魂なのだ、と。もとより彼も、それまで魂などといふ異様なものについてはまともに考へたこともなかつたが、大地から千米もはなれた虚空の中で考へる死は、最も非現實的なものを最も現實的なものとして考へさせた。彼は花びらの一ひら一ひらが音もなく、冷く正確な、幾何學模様のうねりのあひだにおちて、小さな波紋をくりひろげる様を想像した。僚友たちが墜ちてつづつた波紋の中心は、既に昨夜來靜もつてしまつてゐるであらうが、しかしその波紋は、空中にまでのびひろがつて來て四人の男の魂をゆるがしてゐた。波紋はなほさらに遠くのびて彼らの妻や子供たちの魂の戸を叩き、うちがはへ入つてゆくのだ。彼は何がなし今日の搜索の目的は達せられた、と思つた。

下降氣流の上に出た機は、待ちかまへてゐた白い雲につつまれた。

(一九五〇年十二月「新潮」)